

自己評価報告書

平成23年4月14日現在

機関番号：32699

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成20～23年度

課題番号：20520094

研究課題名（和文）近代日本画からの遡及——江戸時代写生画をめぐる図像と言説

研究課題名（英文）Chart image and literary remark theory over realistic painting in Edo period; Retroactive effect from modern Japanese style painting

研究代表者

今橋理子（IMAHASHI RIKO）

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：70266352

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：江戸時代絵画、近代美術、写生、画題、図像と言説

1. 研究計画の概要

研究代表者はこれまで、一貫して「江戸の花鳥画」に対する従来認識の再考を目的とする研究に従事してきた。そしてこれらの研究を通じて、次なる問題として今日〈写生画派〉に括られる円山四条派や森派、および秋田蘭画派などが、いずれも「近代日本画」創造期の明治時代に意識的に見出され、再評価されたことに改めて思い至った。本研究ではそのような視座に立って、明治の近代日本画、とくに江戸時代以来の「写生」の問題を、リアリズム表現として再解釈しようとした画家や作品群から遡及し、現代の美術史研究にまで影響を及ぼしている江戸の写生画に対する理解を、再検証することを試みる。そしてこの検証は逆に、江戸時代当時では高く評価されながら、明治以後は久しく存在が忘れられていった写生画家や画派についても、同時に再考察を加えることとなるであろう。

2. 研究の進捗状況

本研究課題に基づいて2つのケーススタディを設定したが、現在までに著書の刊行という形でケーススタディの一つに関しては研究を完結させることができた。二つ目のケーススタディである京都画壇における「写生」の問題に関しては、現在江戸時代絵画との比較検証のために竹内栖鳳、上村松園に関し調べを進めている状況である。とくに写生的花鳥画の問題として栖鳳は重要であるため、当時の雑誌に現れた写生言説との関係について現在検討中である。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

研究期間前半では秋田蘭画を中心に据えた

が、それに関しては単著の形で発表し、複数の新聞書評に取り上げられたり、また賞の受賞に至るなど、一定の高い外部評価を受けることができた。期間後半における研究では明治期に至る京都画壇が中心であるが、その研究途上で行当たった花鳥「画題」の変容の問題について途中段階ではあるが試論としてまとめ、学内紀要に発表した。

4. 今後の研究の推進方策

本研究課題にもとづく期間はあと1年間となったため、京都画壇に関する作品調査をできるだけ速やかに終わるとことを目指す。またそれに伴い、すでに始めている新しい著作の執筆を出来る限り早い段階で完成させるべく、執筆に力を傾けたいと考えている。

5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①今橋理子「鸚鵡の肖像——〈花鳥画〉と〈美人画〉の境界」岩波書店『文学』第10巻5号、2009年9月、121-137頁。②今橋理子「波と兔「月の光」のかたちと言説」、『学習院女子大学紀要』第13号、1-16頁。

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計2件）

①今橋理子『秋田蘭画の近代——小田野直武「不忍池図」を読む』（単著）東京大学出版会、2009年、全400頁。②今橋理子「甦る江戸の桜——桜狂の画家・

三熊思孝」、永田洋他著『さくら百科』所収、丸善、2010年。

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称： 特になし
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

①著書『秋田蘭画の近代』（東京大学出版会、2009）に関する書評・関連記事が2009年5月～2011年4月までの間に、日本経済新聞、読売新聞、毎日新聞、秋田魁新報、岩手日報、熊本日日新聞、千葉日報、沖縄タイムス、山形新聞、新潟日報、図書新聞、読書人などにおいて複数取り上げられる。

②著書『秋田蘭画の近代』（東京大学出版会、2009）にて兵庫県姫路市主催・第22回和辻哲郎文化賞「一般部門」受賞。

以上